

平成26年6月5日発行(毎月5日1回発行)

第54巻6月号(通巻639号)

風土



6

わらび餅

神蔵

器

水垢離の落花のごとし神田川

啓蟄や「善人なほもて悪人をや」

つばくろの下に足湯や菜の花忌

竹の子を躪あつらの下に探しあて

桂郎は酒仙ならずや竹に花

子規庵の朝顔といふ種子を蒔く
大風の靖国ざくら花吹雪く
花冷や己がのぞきて心電図
病院に甘茶接待されてをり
四月馬鹿死ぬまで余生などあらず
眠りては遠くて近き西行忌
いちはやく春灯点しかすみけり



竹間集

同人作品



鯪の湖

田中佐知子

観音の彼方かぎろふ鯪の湖
陽炎や竹生島指す最終便
あしかびや千体仏は湖に在す
健啖の夫の頤目刺食む
城崎に木屋町通り花の屋
湯飲場の柄杓に受けて花ひとひら
飛花落花直哉の小径辿りつつ

朝日子

工藤ミネ子

雪解や庚申塚も疲れたり
朝日子も夕日もまぶし雪代田
鶴去る声降りかぶる子の忌日
困い解く結び目硬き夫の手順
鷹飛んで干拓村の風平ら
菩提寺の深き合掌囀れり
武具飾る夫やはらかき目となりて

花言葉

柴田久子

あたたかや真水のごとく子の眠る
沈丁花離れてよりの深呼吸吸
み仏の大きてのひら囀りぬ
子の折りし紙風船の突けば飛ぶ
円位より西行がよし春の月
花言葉あふれてゐたり種袋
種袋犬のよろこぶ音のして

風 車

中村 洋子

啓蟄や体内時計巻き直す
一つ売れ一つ挿し足す風車
折り紙の小さき四角や鳥帰る
頁繰る風三月の時刻表
五位山てふ位をもらひ芽立ちかな
待賢門院璋子西陵木の芽吹く
鳥帰る湖北を守る観世音

白酒の酔

橋添やよひ

白酒の酔を雛と分ちけり
桃の花甲斐路おぼれんばかりかな
手に透かす春のひかりやははの恩
梅見上ぐ背びらに両手あずけゐて
亀鳴いて被曝青桐天を突く
松の芯辰巳にのこる隅櫓
秀頼の会見の記や梅白し

声がひかりに

南 うみを

蛇穴を朽葉もたげて出るところ
橋くぐる遊びを雨のつばくらめ
伸びることうれしき春の蚯蚓かな
ひばり揚がる声がひかりに変はるまで
君嫁菜吾からし菜の握り飯
水かげろふはなれぬ春の障子かな
深吉野仲藤本安駒生克の太き蕨を摘み残し

若 布

島谷 征良

春を待つ少女の鞆鈴鳴つて
福は内長男いつまで独り者
冴返る日の光そのものさへも
山の神起きよと春の虹立てり
塩振つて締まるごとしよ鱈の斑
鎌倉の大町に買ふ若布かな
いぬふぐりなりにふるへて風過ぐる

桃の花

宮川みね子

献立の墨書一枚桃の花
春の風潮満ちてくる匂ひかな
紅梅の空母の忌のありにけり
橋脚の渦ひろがりぬ水ぬるむ
問診票丸で答へり春寒し
桃の花手首がすこしやはらかに
囀の一樹のなかに入りけり

桜まじ

浜 福恵

蓮池の眠りは深し猫の恋
遍照金剛水底に蜷這ひしあと
山水の流れにすすぐ野蒜かな
人知れず海恋ふ色の白椿
地酒「熊川宿」の暖簾や桜まじ
燕来る風の高さの虫籠窓
いつぶく屋の開け放たれて風車

初がつを

山田 暢子

春の雪スクランブルの交差点
黄水仙水替へてより向きかはる
鳥帰る煉瓦倉庫にレストラン
春の海三好達治の忌の来り
桜餅ひとりの時間ありにけり
花御堂下校の子らに囲まるる
初がつを晩年といふ佳き月日

鳥帰る

門伝 史会

ラウンジや霞の中に警視庁
盲導犬寄り添ひてゆく春疾風
心電図肌身にひと日春埃
晩年や振れば音する種袋
紋付鳥そばに来てみて種を蒔く
改築の終の棲家や鳥帰る
日永かな捨てる事より考へず

道南の風

相沢有理子

暮るる春江差追分せつせつと
雪解風ホバークラフト沼地駆る
泥炭地ものかは父子凧揚ぐる
逸る犬先立て森へ獵期了ふ
海猫渡る風佗びしらに啄木碑
春塵や栄枯露はに小樽港
蟹工女今生き生きと多喜二の忌
声弾む名残りの雪の商学部
おぼろ夜の酸味ほどよき薔薇茶かな
萌ゆる草荒れ地に張りし鉄鎖錆ぶ

山河集

同人作品



神蔵 器選

竹林を横ざまの雨西行忌
さへづりの奥へ押しゆく車椅子
花馬酔木庭師の指の細かりし
住職の風呂敷包み木の芽雨
春光の一点として鳥歩く

浅田 光代

地の起伏に畦の従ふ鳥曇
校庭の子らに弥生の山近づく
休み田に鴉の遊ぶ涅槃西風
初蝶の充電完了翔ちにけり
梁杭にまた同じ禽水温む

生田 作

降り積もる名残の雪と言ふけれど
箒立つ一本樗芽吹きせり
南朝の末とし生きて梅の村

上辻 蒼人

菜の花と並べて売りし高野槇
水明かりして春の雲遊びけり
不老てふ盆梅ことに香を放つ
ポケットに封書一通鳥雲に
茎太き明日香の土筆摘みにけり
巢燕やフランスパンを抱き来て
ゆきすぎて修二会の僧の焦げくさき

池田 光子

ひとところ夕日を残し魷を挿す
乗り継ぎの空港で買ふ種袋
春眠を誘ふショパンの夜想曲
眠たさは桃の花枝活けてより
ものぐさな海豹も居て水温む

奥田 茶々

◇特別作品◇(抄)

花会式

雨宮 桂子

大梵鐘一打に始む花会式
悔過法要七日七夜の花吹雪
千本の献花白鳳大伽藍
花びらや薬師三尊ひかり合ふ
金堂の杳音はげし飛花落花
春疾風「南都声明」立ちのぼる
てのひらの法輪文や椿咲く
花会式薬壺の紐のゆるびけり
春雷や邪鬼もうす目をしてゐたり
火の中に薬師如来のおぼろかな

風土集



神蔵器選

利休忌の花定まりてしづかなり 藤沢

榎野あさ子

乾坤のまはりて地虫穴を出づ

待ちて咲き散りて七日や花二十日

春潮に心のさざ波こだましぬ

若布舟夕日に干して風になる

渴筆の墨の走りや春の雪 大和

落合絹代

啓蟄や地下に積み上ぐ新刊書

今届く一書を抱き青き踏む

菜飯食ぶ木目美し木曾の椀

鎌倉は小雨にけぶり実朝忌

うぐひすの初音に総身宙に舞ふ 横浜

安永圭子

北窓を開くれば栗鼠の枝移り

啓蟄やメトロ口出口に立ち尽くす

川瀬派展

永き日や春雨匂ふ木版画

門は子を待つためにあり春の宵

菜の花やふと忘れふと思ひ出す 上尾

根岸善行

ひらひらとやがてきらきら鳥帰る

いのちとは優しき色や木の芽張る

朧夜や妻となりたる影法師

少しづつ道具の減りし雛飾る

東京

奥田茶々

雪女東京駅に降り立ちぬ

三角のきつねうどんや京の春

三門に上がれば浄土鳥帰る

卒業子背に最後のランドセル

木の芽雨石堀小路に蛇の目傘

川崎

鈴木庸子

春眠の途中で亡夫とはぐれけり

甲斐はいま投網展げし桃の花

春風やクイーンエリザベス入港す

二分の一人人迎ふスイトピー

廃校は手作り工房に囁れり